講名拝戴140周年記念秋季大祭執行

眞明組の先人たちの歩みを今に。たすけ心を込めて、おつとめを勤める。

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

日々真実聞かすなら、多くの中なれば、神一条世界の身の内たすけ一条のため出て来るなら、一つ話聞かせ〳〵。聞かさねば分からんで。何もたすけ一条の事は後へ引くでない。

明治21年6月19日

10月23日、内統領・宮森与一郎先生のご巡教を頂き、大教会で「眞明組講名拝戴140周年記念秋季大祭」が勤められました。

おつとめ後、神殿講話に立たれた宮森先生は、講名拝戴140周年を記念して勤めることの意義について触れられた上で、「眞明組当時の真っ直ぐで素直な信仰の姿、心意気を大切に、次代へと伝えていただきたい」と期待を述べられました。そして、「今の姿が神一条・たすけ一条になれているか思案し、心の向きを間違わず、ひながたの道を踏み外さないよう、たすけに励ませていただくという決心を、今日はし直す日である」と諭されました。（2～7頁に要旨掲載）

当日は、参拝場内とその周りに椅子席が設けられ、神殿に入り切れない参拝者は、スクリーンが設けられた食堂から参拝。帰参者数は約400名でした。

翌24日は、「眞明組講名拝戴140周年記念おぢば帰り」が行われ、午前11時の本部神殿でのおつとめに合わせて、教会旗を先頭にそれぞれの教会が各礼拝場や神苑に参集しました。この日は他系統の団参も多く、おぢばは賑わいを見せました。

四方正面

先人の口伝に、「一時する事は石の上へ木を植えるも同じ事。これは育つものや無い。日々に百篇も千篇も石の上へ通えば履物の土でも一篇二篇溜まる。その上へ植えたらそれは育つなり」とある。にわかに思いついてすることは、例えば石やコンクリートの上に種を植えるようなもので、育つものではない。しかし、日々たんのうの心を治め、その石の上に百回も千回も足を運び続けたなら、草履の下に付いたほんの少しの土の欠片でもその場所に溜まっていく。それが溜まり溜まって、その上に植えたならば育つ、ということであろう。

今はコロナ禍でなかなか動きができない最中ではあるが、そんな中でもそれぞれ持ち場立場でできるにをいがけ・おたすけは探せばいくらでもあると思う。小さなことからでも、日々積み重ねれば、後々の大きな御守護の種となるだろう。

（竹）

《眞明組講名拝戴140周年記念秋季大祭　神殿講話》

先人の姿に倣い 神一条、たすけ一条に進もう

内統領　宮森与一郎先生

只今は、立教184年の芦津大教会の秋の大祭をお勤めになり、併せて眞明組講名拝戴を記念してのおつとめを結構にお勤めいただきました。手もよく揃い、鳴物もよく揃って、素晴らしいおつとめだと思いながら参拝させていただきました。さすが、夜が明けるまで、畳が擦り切れるまでをどりに励んだ「眞明の踊り講」といわれたほどの教会だと思いました。

今日は芦津大教会にとりましては、講名拝戴140周年という素晴らしい時にあたりますので、思いますところをお話ししたいと思います。

損得なしの信仰

芦津大教会は、140年前に「眞明組」という講名を拝戴されました。その140年前の講名拝戴当時のことを経験された方は、この中には一人もおられないと思います。

それではなぜ、この140年も経ったこの日に講名拝戴を記念しておつとめを勤めたかと言えば、140年前に眞明組に関わった人たちはどんな思いで講を結成したのか、そして、何を目指して今日までそれを続けてきたのかを再確認するために、皆さんはお集まりくださったのだと思います。そして、当時と世相は違っても、結成した当時の思いを見失わずに次の代へと伝えていこうとする、この2つが今日の目的だと思うのです。

眞明組の講名は、明治14年陰暦4月17日に教祖より戴かれたと思います。祭文にもありましたが、それより2年前の明治12年の夏、初代・井筒梅治郎先生は娘さんの身上を御守護いただかれて入信されました。そして、2年後の講名拝戴へと繋がっていくのです。

『天理教事典　教会史篇』には、このあたりのことについて簡単に説明がなされています。

「娘たねの上にあざやかなたすけの現実をみた梅治郎は、従来の大峯山行者の修験道信仰から一転して、熱心に天理教を信仰するようになり、種市と共に遠近の病人に布教した。……『不思議な御守護』を得た人々の評判を聞き、難病業病に苦しむ者が続々とおたすけを乞いに集まり、井筒家は門前市をなす有様であった。」　（45頁）

とあります。さらに、

「明治13年陰暦3月4日、梅治郎夫妻は娘たねの身上の快癒の御礼詣りに、たねを連れて初めて『おぢば』にお礼参拝した。」　（同前）

と続いています。

ここに、注目すべきこと、また今の私たちにできるかなと思うことがあります。修験道信仰から一転して、いきなりおたすけにかかっておられるのです。この記述からすれば、まだ、おぢばへも帰っておられなかったにもかかわらず、です。

このたすけはやくりやくをみせたさに
月日の心せくばかりやで　七号

なにもかもこのせきこみがあるゆへに
むねのうちよりそふぢいそぐで　七号　30
このはなしどこの事やとをもうなよ
みなめへ〳〵のうちのはなしや　七号　31
めへ〳〵にむねのうちよりしいかりと
しんちつをだせすぐにみへるで　七号　32

とあります。これらのお歌の意味するところは、「親神様の御守護を一人ひとりに早くはっきりと見せてやりたい、そればかりを急いている。そのために人間の心の中からすっきりとほこりを払って掃除を急ぐのである。皆、一人ひとりがこれは自分のことと、自分の家の話だと心に治めることが肝心である。本当の真実の心、持って生まれたままのほこりのない心を皆持っている。その心を早く表に出すようにすれば、親神様の不思議な御守護が直ちに実現する」という意味のお歌です。

初代・梅治郎先生が通られた「一転して」とは、「すっきりと一気に」です。「理屈抜きの素直な」ということです。ここに梅治郎先生の素晴らしさがあり、眞明組に繋がった皆さん方の先人たちの「心の定め方」があったと思うのです。

定めるも定めんも定めてから治まる。治めてから定まるやない。……定めて掛かって神一条の道という。

明治24年11月3日

とあります。なってもならなくても、すっきり心を定めてしまう。これが眞明組の信仰の姿であったような気がします。

明治14年、かんろだいの石出しのときは、眞明組の人たちは山から麓までの一番険しい場所を引き受けてくださっているのです。「しんどい所をやらせてもらおう」という、損得なしのすっきりした信仰です。だからこそ、眞明組の信仰は、兵庫眞明組、遠州眞明組、伏見眞明組、東京眞明組、また笠岡、高知へと伸び広がっていったのではないでしょうか。

こうして、講名拝戴140年の旬に、今一度、眞明組の先人たちの心意気を大切に、そして、それを次の時代へと伝えていただきたいと思うのです。眞明組には、人間思案は似合わないと思います。

あらゆる判断を神様に求める

さて、昨年の初め頃より始まりましたコロナ禍での生活も、既に1年半を過ぎて2年に近づこうとしています。皆さん方の生活も、変化した部分もたくさんあると思います。おぢばも、「こどもおぢばがえり」や「お節会」などが開催できず、婦人会、青年会、学生会の諸行事もなくなりました。

何よりも、月次祭の神殿内の参拝や、境内地への立ち入りまで規制しなければならない状況にまでなったときがあります。「どうして神殿に入れてもらえないのか」とか、反対に「どうして各地の教会で月次祭を許しているのだ」とか、問い合わせや苦情や強引な意見が内統領室に届きました。

世の中の人、皆が手探りの状態です。そんなとき、全く参拝者に殿内に入ってもらわず、直属教会長さん方にも入ってもらえず、月次祭をつとめ人衆だけで勤めなければならない

状況になったことがあります。そんなことをしていいのか、そんなことで神様に受け取っていただけるのか、真柱様に許してもらえるのか、世の中の流れや世間の目を気にするあまりに参拝お断りの判断をしてしまってはいないか、難しさを痛感しました。

そんなときは、いろいろな人から意見が出て、判断のつけようがありません。そんな場合、私たちお道の者はどうするのか。

先人は、おさしづに求められました。

明治32年11月23日

ペスト病予防のため秋季大祭延期の事を、警察より忠告により御許し願

として伺いを立てておられます。

大祭々々延ばすよかろ〳〵。これは成程の理。延ばそうと言うても延ばさらせんが理。なれど、どうなりこうなり、不精々々理。

と仰せ下されて、何とかお許しいただいたのです。続いて、

なれど、皆答という。踏み止める理無くばならん。踏み止めるというは、皆の精神という。

とあります。皆のばらばらになりやすい心をしっかり治めよという意味を加えて、どうなりこうなりお許しを得たのです。私たちの先人たちも、たくさんの困難に直面し、思い悩み、その都度伺いを立てて、判断してきたことがよく分かります。

今回は、大祭を延期するようなことはいたしませんでしたが、私たちも教祖のひながたの道を通して、また先人たちが仰いできたおさしづを通して、あらゆることの判断ができることを改めて分かったような気がします。

どんな心でいたのか

昨年は5月、6月の2カ月間、修養科生の募集を停止しました。世間の風評もあり、担当する係からの強い意見もあり、やむなく募集を停止したのですが、それで本当に良かったのかどうかは分かりません。

その分からない理由の1つ目は、おたすけはその瞬間瞬間があるということです。

残らず〳〵遠い所、悠っくりして居ては遅れる。この人ににをいを掛けんならんと思えば、道の辻で会うても掛けてくれ。これからこれが仕事や。

明治40年4月7日

とあります。全教の教会長、ようぼくの方々が「今こそ、この人をおぢばへ、修養科へ」と努力も苦心もされていたでしょう。修養科の募集を2カ月止めたのは、その旬を逃させてしまったかと悔やむばかりです。

2つ目は、日頃から「たすかる場所はおぢば」と言っておきながら、いざというときにその通りできたかどうかです。

なにゝてもむねとくちとがちこふてハ神の心にこれハかなわん　十二号　133

とあります。いざというときに真実が出せるかどうか。この道は小さい心で通ってはいけないとつくづく思います。

コロナは世界を震撼させました。予防措置や対策を怠ってはいけません。感染予防対策や緊急事態の指示などは、専門家の指示に従うべきことなので、修養科の停止は致し方なかったかもしれませんが、心まで小さくなっていたように思います。

先ほどのおふでさきに続くお歌は、

しんちつが神の心にかなハねば いかほど心つくしたるとも　十二号　134

とあります。昨年7月以降再開した修養科は、本当に際どいところまで感染がありましたが、現在まで何とか止めることなく続けることができています。

さあ〳〵遠く〳〵〳〵の理は大きな心に成りて、四方という心に成りて。さあ〳〵大

き心に成りたら、さあ〳〵四方が八方になる。

明治21年10月13日

何が間違うてある。思う心が間違うてあるから速やかならん。一つ定まればいつ〳〵まで一つ事情治まる。

明治22年1月15日

コロナ禍で経験した事柄は「できる、できない」「なる、ならない」という結果ではなく、「どんな心でいたか」にかかっているような気がします。

つとめ場所のふしんの心定め

ここで、ごく簡単に教祖のひながたに触れたいと思います。

天保9年10月26日、教祖は月日のやしろとなられます。そしてそれ以降、貧のどん底に落ち切っていかれる道を急がれるのですが、教祖のひながた50年のうち、約24、5年は信者というような方はほとんど現れていません。文久年間になってようやく、西田伊三郎、村田幸右衛門、仲田佐右衛門、辻忠作、山中忠七といった名前の残る信者の方ができてくるのです。文久3年頃には、教祖は「講を結べ」と仰せられていますので、他にも多くの人々が信仰を始めていたのでしょう。

続く元治元年、飯降伊蔵先生が妻の産後の患いをたすけられたことから入信され、その御礼にと、お社の献納を申し出られます。このときの教祖の仰せは、

「社はいらぬ。小さいものでも建てかけ。」

『稿本天理教教祖伝』53頁

でした。続いて、

「一坪四方のもの建てるのやで、一坪四方のもの建家ではない。」

同54頁

とあり、さらには、

「つぎ足しは心次第。」

同前

とあります。これらの短いお言葉の中には、大切な事柄がいくつもあるように思います。

まず「社はいらぬ」とは、入信間もない人人に対して、初めから教祖が月日のやしろであるという、本教の信仰の一番の根本、ゆるがせにできない部分を厳然とお示しになっておられるのだと思います。

今の私たちも、信仰の基本はどこにあるのか、信仰者としての判断の基準はどこにあるのかを忘れてはなりません。

次に「一坪四方」とは、畳2枚です。建物としては、一番小さなものではないでしょうか。一坪四方の建物を教祖はどうしようとなされたのか不思議に思いますが、「一番簡単なものでよい」ということかもしれません。大きな負担がないので、「私でもやらせてもらえる」と思えるようなものからでいい、ということでありましょう。「私にもできる」と思える。また、周りにもそう思ってもらえる。ここが大事です。

私たちも日頃からそんな言動ができているでしょうか。無理に無理を重ねなければできそうもない大きな目標よりも、できそうなことからこつこつと始めてみるのが肝心です。こつこつは一度にではなくて、毎日少しずつ、日々積み重ねるということです。

続いてのお言葉は、「継ぎ足しは心次第」です。つとめ場所のふしんは、居合わせた人々が相談の上、3間半に6間のものを心定めされます。一坪四方からすれば、21倍にあたるものです。費用を引き受ける。手間を引き受ける。瓦を、畳を引き受ける。ふしんのための寄進をさせてもらう。それぞれが、自分がやらせていただきたい分を決めて精いっぱい行う。言われてしたのではなくて、継ぎ足しする部分こそが、私たちの信仰ではないでしょうか。

おさしづに、

この道というは、誰にどうせえ誰にこうせえ、とは言わん。道は皆心だけ〳〵。

明治30年9月8日

この道というは、誰にどうせえこうせえ、たゞ一つも無きもの。たゞ、心持って、心次第の道である。　明治31年11月13日

とあります。大切なことは、誰かに言われてするのでなく、自らつとめたい、やらせてもらいたい、精いっぱいつとめたいと願い出るところにあります。

我が身思案のない姿

ここで一つ注視しておく点があります。教祖は建家ではないとおっしゃっています。建家とは、人が使用する建物のことをいいます。建家ではないとは、自分たちの都合のよい、自分たちにとって勝手のよい、そういうものではないということでしょう。つまり、我が身思案ではない、勝手な解釈のない、自己満足に陥っていない、世上の考えに流されていない姿と考えたらどうでしょうか。

積極的に自ら行う。かつ、人間思案のない姿とは、どうあればいいのでしょうか。ちょっと難しいような気もしますが、

このみちハなにかむつかしめつらしい みちであるぞやたしかみていよ　四号　101

と仰せられています。たすけ一条の道はなかなか容易な道ではないけれど、これによって珍しい御守護を頂く結構な道である、というお歌です。

珍しいものとは、手に入れにくいものです。手に入れるためには努力が要ります。下ごしらえや仕込みといった準備期間が要ります。何度も練習を重ねたり、弟子入りしたり、修行したりして身につけていくもの、これが珍しいものです。簡単ではない、むしろ難しい中を通っている中に、その先に自然と親神様の御守護が分かってくるのかもしれません。

元治元年9月13日に始まったつとめ場所のふしんは、同年10月26日に棟上げを迎えます。そして、翌10月27日、大和神社の一件が起こることとなります。

大豆越村の山中家へ向かう一行が、途中大和神社で行われていた祈祷を妨害したとして、3日間にわたり拘留された事件です。この事件をきっかけに、せっかく道に繋がってきた人々も、多くが離れていくこととなりました。こかん様が「行かなんだらよかったのに」と申されると、教祖から、

「不足言うのではない。後々の話の台である程に。」　『稿本天理教教祖伝』59頁

とのお言葉がありました。これより以降の教祖のひながたの道は、迫害と攻撃の中を、そして官憲の取り締まりの中を進んでいかれることとなります。

秀司様を台として

さて、教祖の長男である秀司様は、教祖が月日のやしろとなられたときは17歳でした。17歳といえば、すでに中山家がどういう家なのか、どれほどの田畑を持ち、財産は如何ほどか、自分はどんな立場になっていくのかは十分に理解もし、覚悟もされていたことでしょう。

ところが立教以来、それまで想像していた将来は一変することとなります。人並み外れて優れた母親であったはずの教祖は、親神様の御命のまま財産を手放し、家屋敷を取り払い、施しに明け暮れることになられたのです。そうした現場を目の当たりにして、秀司様の心境はいかがであったでしょうか。

母屋が取り払われて後、秀司様は教祖の言われるままに木綿の紋付を着て、青物や芝の商いに出られたといいます。村人たちが「紋付さん」と呼んだのは、親しみを込めてだけ

ではなく、嘲（あざけ）りの気持ちも含んでいたのではないでしょうか。それをどんな気持ちで聞いておられたのでしょう。

教祖の教えが近隣諸国から遠方に広がるにつれて、ますます干渉迫害が厳しくなっていきます。その中、慶応3年、吉田神祇官領へ願い出て、神祇、祭祀の許可を取り付けられたのも、明治9年、堺県から風呂屋、宿屋の鑑札を受け開業なされたのも、明治13年、金剛山地福寺へ願い出て、仏式教会を設立なされたのも、すべては布教公認や教会設置の許可を得て、教祖の身の安全を守りたい、そして安心して教えを説くことができる方法を講じたいとの一念でした。

これに対して教祖は、

「そんな事すれば、親神は退く。」

同148頁

とまで仰せになるのです。それでも公認を取り付けに行かざるを得なかったのは、教祖に対する官憲の迫害があまりにも激しかったからでしょう。これほど教祖を思い、道の現状を憂い、道の将来に心を痛めた方は他にあったでしょうか。

しかし、これらの秀司様の計らいは、教祖の許されるところではなく、教祖はひたすら神一条であるべきことを求められたのです。

けふまでわなにの事でもちいくりと
ゆハすにいたる事であれども　十五号　1
もふけふわなんでもかてもゆうほどに
をやのざんねんこれをもてくれ
十五号　2

もう今の時旬は、これまで言ってこなかった親神の積もり重なるもどかしさをよくよく察してもらいたい、という内容です。

明治13年9月、地福寺配下の転輪王講社の開筵式を終えて間もなく、その年の暮れから秀司様の身上がすぐれなくなり、明治14年4月8日、61歳で出直されます。

そはなるの心ちがゑばぜひがない
そこでくど〳〵ゆうてをくぞや
十五号　31

とあります。「心違えば」と仰せられるその間違いとは何か。教祖は秀司様を台として、私たちに何を伝えようとされたのか。今一度お考えいただきたいと思うのです。

神一条の姿とはどんな姿でしょうか。秀司様を台にしてまで、教祖は私たちに神一条であり、ぢば一条であり、たすけ一条を求められました。「一条」とは、それに専念しているということです。

芦津の初代会長さんは「一転して」でした。それまでの姿から一気に変わって、まだ教祖の顔も知らないのに、おたすけに回っておられるのです。

それに繋がる皆さん方です。今の姿は、神一条になれているか、たすけ一条になれているか、どうかご思案いただきたいと思うのです。

初代の気持ちを忘れぬよう

コロナの時代です。でも、私たちの心の持ちよう一つによって、たすけの御守護を頂けるチャンスと変えられるはずです。そのための知恵を出し合って、心の向きを間違わないよう、ひながたの道を踏み外さないよう、何としてもこの道を通ってたすけに励ませていただくという決心を、今日はし直す日だと思うのです。

眞明組の皆さん方は、どうか初代の気持ちを忘れないように「**いちやのまにも心いれかゑ（十七号　14）**」と仰せられるのですから、同じ気持ちになって、これから先150年、60年、70年と進んでくださることをお願いして、今日のお話といたします。

（文責　編集部）

《眞明組講名拝戴140周年記念秋季大祭　挨拶》

先人の道すがらを手本に
末代続く道への歩みを

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、日頃はたすけ一条の道の上に真心を尽くしてご丹精くださり、大変ご苦労様でございます。また本日は、内統領・宮森与一郎先生のご巡教を頂きまして、皆様方と共に眞明組講名拝戴140周年記念秋季大祭を、滞りなく結構に勤めさせていただきましたことは、誠に有り難い次第でございます。

さて、井筒梅治郎初代様や先人が、教祖より「眞明組」の講名を拝戴してから140年の節目の今年は、初代や先人の信仰を尋ね、信仰の元一日に思いを致して、その精神を学ばせていただき、そして今日まで道を繋いでくださった先人方の道すがらに思いを馳せて、感謝と報恩の心で通ろうと申し合わせてまいりました。

教祖のひながたを目標に通られた初代や先人の道すがらは、今道を通る私たちの信仰のお手本です。その中でも、大いに学び、手本にさせていただきたいのは、先ほど内統領先生も仰せられたように、小さい心ではなく、大きな心で道を通ることだと思います。

今日の大祭は立教の元一日を祈念して勤めさせていただきましたが、親神様が教祖のお口を通して人間世界に初めて発せられた立教のご宣言ともいうべき第一声は、

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

『稿本天理教教祖伝』1頁

とのお言葉です。

江戸時代の後期に大和の一寒村で、世界一れつをたすけたいと宣言されたのです。その後、信者がだんだんと増えてきた幕末から明治の初期に、教祖は世界たすけを説かれたのです。

当時の信者さんの大半は、大和から一歩も出たことのないような農民であります。そうした人々に世界たすけを説かれたわけです。こう考えれば、まさにお道の教えはダイナミックな教えです。この世界たすけ、世界一れつをたすけたいとの親神様の思召にまともに応えて、それこそ大きな心でダイナミックに動き働かれたのが、道の礎を築き、固められた初代や先人です。

おさしづに、

この道は大きい心持っては大きい道に成る。小さい事に思うてはならん。小さい心持って居てはあちらからにをい、こちらからにをい、一つの邪魔になる。

明治24年6月8日

と教えてくださいます。また、

さあ〳〵大き心に成りたら、さあ〳〵四方が八方になる。

明治21年10月13日

とも教えられます。

私たちには各々厳しい現実があります。しかし、それだけにとらわれて汲々としてしまい、心が小さくなってしまったら伸びるものも伸びません。でも大きな心を持って通れば、道は大きくなり四方八方に伸びてゆくのです。これが初代の道すがらから学ぶ

ことのできる、大切な信仰の手本です。

梅治郎初代様は教祖にお喜びいただきたい一心で、それこそ大きな心でたすけ一条に誠真実を尽くされて、大木の根としての生涯を通られました。この初代様の後に続かれた先人たちも、大きな心で世界たすけに踏み出されたのです。

現在の芦津の部内の遠方教会を2、3例に挙げますと、眞明組の導きから大阪で入信をされた、後の高知大教会初代会長の島村菊太郎先生は、高知に戻って布教に専心されましたが、梅治郎初代と相談の上、眞明組から数名の者が布教の応援に高知に出立しました。その一人の土井嘉七先生は、後の高岡大教会初代会長の佐々木氏ににをいをかけ、周辺のおたすけに奔走をして高岡の礎の一端を担われ、大阪に戻られてからも、たすけ一条の志高く、当時未開の地であった北海道に開拓布教に赴かれて、現在の當別分教会の基礎をつくられました。

また、梅治郎初代様に理を仕込まれた寺田松太郎先生は、おぢばでおさしづを頂いて、夫婦で太平洋の荒波を船で越え、当時、「絶海の孤島」と言われた奄美大島の地に信仰の根を下ろして、大島分教会を設立しました。その後、教線は沖縄まで伸びて沖縄分教会の設立に繋がったのです。

さらには、鹿児島から大阪に出て大島紬の行商をしていた岩切カ子先生は、たすけていただいた御恩報じに、当時誰一人信仰する者がいなかった島原の地に、女手一つで単独布教に出向かれて、苦労苦難の中、熱烈なおたすけ活動をされて、島原分教会を設立されました。

ここに3人の先人を例にとりましたが、小さな心ではこうした道は通るに通れません。この方々以外にも眞明組には道を切り開いたたくさんの先人がおられましたが、そうした人々は大きな心でたすけ一条の道を歩んでくださったのです。初代や先人がこのように大きな心になれたのは、親神様の御守護に対する絶対的な信頼と、教祖のお導きに心底もたれて通られておられたからだと思います。

教祖が現身を隠されてから、人々に広くおさづけの理をお渡しになられましたが、梅治郎初代様も早々に神水のさづけを戴きました。これは器に入れた水を三口飲むことで、神水のさづけの理によって、その水が御神水になって、これがこうのうの理になるというものです。

この水のさづけを戴かれてから3年後に、大阪で「新町焼け」という火災が発生しました。これは西区新町の東の端にあるせんべい屋から出火をして、折柄の東風に煽られて2日間燃え続け、近隣20の町が灰燼と化し、約3千戸が焼失するという大火災でありました。当時立売堀にあった眞明組の事務所にも火が迫ってきました。このとき初代様は、器に入れた水を神前に供え、主立つ人々と共に一心に祈願をしておつとめを一座勤めては、その御神水を手桶に移して、屋根に上がって燃え盛る火に向かって、「なむてんりわうのみこと　なむてんりわうのみこと」と唱えて振りかけられたのです。

講社事務所におられた今川聖次郎先生、岡本久太郎先生、宮田善蔵先生、河合六兵衛先生などの先人方は、白木綿を身体に巻きつけ、白足袋を履いて祈念をしておられたといいます。命を賭してでも神様をお守りさせていただくという固い決心の表れだと思

います。こうして、初代様がなおも御神水を振りかけられていたときに、突然風向きが変わり、板塀を焼いただけで、荒涼たる情景の中にたった一つ眞明組講社事務所だけが無事に焼け残るという、実に不思議な御守護を見せていただいたのです。初代様をはじめ一同は驚喜し、この御守護に勇み立ったのは言うまでもありません。それにもまして驚きの声を上げたのは、これを見た世の人々であったと伝えられています。

この逸話に留まらず、親神様の御守護を心底信じ切ってもたれ切って通れば、いばらの道や崖路、火の中、淵中を通って細道に出て、それを越したら楽しみの道に導いていただけることを、初代や先人たちはその道すがらを通して、私たちに教えてくださっているように思えてなりません。親神様の御守護を信じ切り、教祖存命の理にもたれ切って、大きな心で道を歩まれたのが初代や先人であります。この信仰を今道を歩む私たちも大いにお手本にさせていただきたいものであります。

もちろん当時と今とでは社会構造も違いますし、科学や医療は格段と進歩しています。また地球の裏側の情報がすぐに手に入るような超情報化社会、人類総メディア時代です。ですから初代と同じような道を通るのは難しいかもしれません。しかし、時代が変わっても、親神様の一分の隙間もない御守護、教祖の一点の曇りもない親心と確かなお導きは、今も変わらないのです。そしてその時代時代を変わらぬ誠の心で通られた初代や先人の理と徳があり、その道すがらが手本として残っているのです。後に続く私たちにとっては実に有り難く、頼もしい限りです。

この道は末代の道です。次の世代に信仰の喜びを伝え繋いでいくことが、今道を通る私たちの大切な役割です。現状はコロナ禍を含めてさまざまな難しい状況に直面しているように感じます。実際に厳しい現実に心穏やかでない方もおられると思います。しかし、これはいつも申すことですが、この道の教えはこの世治める真実の道です。私たちは間違いのない確かな信仰をしているのです。初代や先人のように御守護を腹の底から信じ切り、もたれ切って大きな心でたすけ一条に通れば、その先必ず楽しみの道にお導きいただけるに違いないと思うのです。

お道を信仰するお互いにとって、次の成人の塚は、教祖140年祭であり、その10年後には150年祭と、その翌年に立教200年を迎えるのです。これから先、末代続く頼もしい道の御守護を頂けるように、教祖の年祭をまずはしっかり見据えて、大きな心でたすけ一条に働かせていただいて、成人の歩みを心勇んで進ませていただきましょう。

なお明日は、講名拝戴記念のおぢば帰りの日です。午前11時におつとめをお願いいたしております。各礼拝場や神苑のパイプ椅子から11時に合わせて、これまでに頂いております親神様、教祖の御恩に心からお礼を申し上げて、お勤めくださり、ご参拝くださいますよう、お願いを申し上げる次第です。

今日はこうして眞明組講名拝戴140周年記念秋季大祭を、有り難くも結構に執り行うことができました。梅治郎初代様や先人の祖霊様方もお喜びくださっていることだと思います。

本日は大変ご苦労様でございました。

（要旨）

眞明組講名拝戴百四十周年記念　秋季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、陽気ぐらしを楽しみにこの世人間をお創め下され、旬刻限の到来と共に教祖をやしろにこの世の表にお現れ下さいまして、世界たすけの最後の御教えをお啓き下さいました。爾来、長の年月、変わらぬ親心と自由の御守護のまに〳〵成人の道をお連れ通り下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。私共は、賜る御恩にお応えできるよう、日々勇んで道の御用に励ませて頂いておりますが、その中にも今年は教祖より眞明組の講名を拝戴してから百四十周年の節目に当たりますので、おぢばよりお許しを頂きました今日の吉日に、内統領・宮森与一郎先生のご巡教を頂いて、只今から役目に与る者一同、心一つに座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、眞明組講名拝戴百四十周年記念秋季大祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を大切な一日と参き集いました芦津の道の子供達が、喜び心も一入に、一層の成人をお誓い申し上げ、世界たすけの守護を祈念してつとめに勇む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、遍く世界にたすけの理をお垂れ下さいますようお願い申し上げます。

思えば眞明芦津の道は、明治十二年の初代・井筒梅治郎の入信に端を発し、教祖からお掛け頂いた「大阪に大木の根を下ろして下されるのや」との尊きお言葉を胸に湛えて、おたすけ頂いた人々と共に信心に励む中、明治十四年に教祖から眞明組の講名を拝戴し、更には明治二十二年に教会設立のお許しを戴いて、この道は今日へと続いております。この間、親神様から言葉に言い尽くせぬ程の一分の隙間もなき御守護を賜り、教祖には一点の曇りもなき温かな親心にお導き頂いて参りました。そのお蔭を以て、幾重の節も乗り越えて、百四十年という年月を恙なく結構にお連れ通り下さいました御厚恩に、こと改めて御礼を申し上げます。誠に有り難うございました。

芦津に繋がる教会長、ようぼくは、晴天の日も、雨嵐の中でも、一手一つに心を結んで世界たすけに真実を尽くし伏せ込まれた初代や先人の後に勇んで続くことができるよう、教祖がお付け下されたたすけ一条の道を、たすけ一条の心で結び合って、初代や先人の信仰を手本に勇んで進ませて頂く決心でございます。更にはお聞かせ頂く宮森先生のご講話を心の糧として、心明るく成人の道を歩ませて頂きたいと存じます。

何卒、大らかな御心にこの心定めをお受け取り下さいまして、変わらぬ御守護のまに〳〵成人の道をお導き下され、これから先、陽気ふしんのようぼくとして存分に働かせて頂きまして、世界たすけの頼もしき道をお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

眞明組講名拝戴百四十周年記念　秋季大祭祭典役割

祭主	大教会長	扉者	岩切正教	扉者	山本義範
指図方	井筒文夫	賛者	石川健郎	賛者	川畑正博
献饌長	守田清一	伝供	在籍者一同		

	てをどり	座りづとめ	前半	後半
	大教会長	奥田正儀	岩切正義	奥田正儀
	奥田正徳	梶川和隆	梶川和隆	岡本久昭
	石川道夫	木村真次	木村真次	今川聖一
	会長夫人	榎　理恵子	榎　理恵子	竹内淳子
	前会長夫人	松本さだえ	松本さだえ	浜田千代実
	浜田たつゑ	山埜こずえ	山埜こずえ	木村理恵

	地方	笛	琴
	湯川正圀	山田道弘	井筒ちぐさ
	井筒敏成	岡島秀男	奥田富美子
	守田清一	今川政治	中村美津代
	加世田洋	中村俊和	望月恵美
	立花善文	浜田宣郎	河合遊喜恵
	河端芳雄	西本義之	吉田幸子
	樋川泰士	河合善洋	山田秀子
	新居里実	梶川芳男	加世田陽子
	吉田裕樹	瀧本庄司	梶川文子

	ちゃんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓
	山田道弘	瀧本眞二郎	奥田眞治	竹内義忠	
	吉田裕和	立花善三			
	石川健郎				

シリーズ　夢――未来を拓くために

第３回　修養科修了後の夢

修養科第962期修了生　紙谷理史（かみや さとし）×川口晃徹（かわぐち あきと）×狗巻佳歩（いぬまき かほ）

身上や事情でおぢばにお引き寄せいただいた３人。３カ月の修養科生活で何を学び、これからどう進んでいくか。「自分ができるおたすけの実践」を胸に、それぞれが新しい道を歩み出します。

――修養科を志願されたきっかけを教えてください。

紙谷　22年間勤めていた会社を退職して、この先どうしようかなと考えたときに、妻が信仰のある家で育ったので、妻と妻のお姉さんたちから勧められました。時間も空いているし、自分でもこの先どうしたらいいかという迷いもあったので、天理教を学ぶいい機会として行ってみようかな、というのがきっかけです。

修養科は、修行というか、仏教でいうとお寺に入るみたいな厳しいイメージを持っていたんですが、実際に来てみると、小学校とか中学校に入り直したような、ほんわかした雰囲気でしたね。

川口　私も仕事を辞めたことがきっかけで志願しました。

子供の頃は「こどもおぢばがえり」にも来ていましたし、鹿児島教区の鼓笛隊や学生会もやってたんですが、仕事をしている間は信仰から離れていて、まだようぼくでなかったということもあったので。

狗巻　私は1年前に頂いた身上をきっかけに入科しました。

所属の会長さんに高校を卒業したぐらいから、「いつかは修養科に行ってね」と言われていて、神様の方を向いて過ごしていなかったから、正直「行きたくないなあ」って心の中で思ってたんですけど、自分が身上になって、手術の前にたくさんの方からおさづけを取り次いでもらって、手術の日も時間に合わせてみんなでお願いづとめをしてくださって、「人のたすかりをこんなに時間を使って願ってくれる宗教ってすごいな」って思っていました。

――修養科で印象に残ったことや学んだこと、感じたことは？

川口　僕は修養科でおさづけの理を拝戴したんですが、拝戴の時の感動は二度と経験できないな、というのと、詰所に戻ってきたときにみんなが待っていてくれて、みんなの前で最初のおさづけを取り次いだのがすごくいい経験でした。修養科で拝戴して本当に良かったな、って思います。

実は初席は17歳のときで、20年かかっておさづけの理を拝戴したんです。20年かかって、心の成人をしなくてはって思っているときに拝戴したことが、僕にとっては良かったと思うんです。

狗巻　川口さんはすでにベテランの先生みたいで、初めてのおさづけの取り次ぎのときも、初めてじゃないって思うぐらいでした。

写真左・紙谷理史さん（44歳　甲邊分教会）「３カ月間、毎日おさづけを取り次がせてもらいました。今後は身近なところでも取り次いで、経験を積んで自信をつけたいと思います」。写真右・三恵夫人。

紙谷　私は結構前にようぼくになっていたのですが、ようぼくの中身が分かっていなかったんです。修養科に入って、ようぼくの使命も学んで、それに対して自分もそうなっていこうと改めて自覚したところで、責任感というか、頑張らなくちゃっていう勇み心がでてきたかな、と思います。

修養科に来る前の自分には、信条というか信念がなかったので、教祖の教えという軸が自分の中に持てたかな、ということを感じています。

これまでは自分中心で、自分が良くなろうという思いで、相手に何かをしようとかはその次だったんです。ここでいろいろな話を聞いて、そういう方向に心が傾いているのを感じているので、それを大事

にしたいと思っています。

狗巻　私は、修養科に来た当初は治療の影響で、何を食べても味が全然しなかったんです。毎日心も身体も結構しんどくて、頭も痛いし、何もやりたくない、っていう感じだったんです。でも、1カ月目の途中で、「何か心定めをしよう」と思って、トイレ掃除が苦手だったので、トイレ掃除のひのきしんを頑張ろうって決めました。すると、その次の日からご飯の味がするようになったんです。

写真中央・狗巻佳歩さん（24歳　畦川分教会）
「おさづけを取り次いでもらうとき、みんなが私のためにこんなに祈ってくださるんだっていう有り難さをすごく感じています」。写真右・母親の美紀さん。左・坂井清人畦川分教会長。

それからだんだん体調も良くなってきて、毎日御守護を頂いているなあって感じられて。おいしくご飯を食べられたりとか、飲み物を飲み込める当たり前が、実は当たり前じゃなかったと気付かせてもらえて、毎日親神様の御守護を頂いて生かされているんやなあって感じています。

――修養科で学んだ「心に残る言葉」はありますか？

狗巻　「たすけあい」という言葉がすごく好きです。授業中にしんどくなることがあって、そのときすぐにクラスの方たちが気付いて声をかけてくれたり、担任の先生も副担任の先生も授業中にしんどそうにしてたらすぐに気付いて、声をかけてくれて。人を思いやって、クラスの中でもたすけあっている姿をいろんなところで目の当たりにして、本当に素晴らしいなあと思います。

それと、ある先生がいつも言っていたことですが「受け取り方がいいと楽しい」という言葉です。「起こってくることにはすべて意味がある」と教えていただいて、たとえ起こってくることが自分にとってつらいことだったとしても、自分の受け取り方次第で、そのつらいこともいい方向に捉えることもできると思います。

紙谷　私は『逸話篇』にある「天に届く理」という話が好きです。人からものを頼まれると「えっ」て思っていたんですけれど、それを「自分に与えられたいい機会だ、結構だ」って思うようにするのが大切だと思って、自分の中にしっかり残しておきたい話だと思っています。

何事も不足に思わず、与えられたことに感謝して、結構だと思うこと。ある程度年齢を重ねて、器の大きい人になれるような自分づくりをすることで、頼まれごとや与えられたことを快く受け入れて、チャレンジしてみるということなのかなと思います。

この前、クラスで感話があったんですけど、感話大会に出る人も決まっていてほっとしているときに、急に先生から話をするように指名されて、最初は「えっ」と思ったんですけど、この言葉を思い出して、チャンスを下さったんだ、結構と受けさせてもらおうと思い直しました。

川口　僕は「里の仙人」という言葉が好きです。俗世界から離れて仙人になることができても、俗世界の中にいながらの仙人というのは、逆に天理教はすごく過酷で難しいところをみんな目指しているなあって。でもそれが大事なんだなって思います。

以前、仕事をしていたときにもいろいろ思い悩むことがあったんですけれど、クラスでねりあいをしたときに、「あほうになれ」とか、「ぢばは鏡やしき」「癖性分を取りなされや」とか、いい言葉をたくさん聞いて、それがすごく心に刺さりました。

狗巻　川口さんは、ほこりを積んでなさそうやなあっていつも思ってました。私は腹が

写真中央・川口晃徹さん（37歳　芦南分教会）
「修養科はいろいろな人がいて、悩んでいる人でも『いろんな人がいるなあ』って思えるし、みんな優しいので、安心できるところだと思います」。

立つとすぐに顔に出ちゃうんですけど、川口さんは全然出ないから、腹立つこととかあるんかなあ、と思ってました。優しい顔でニコニコしてて、いい受け取り方ができてるんですよね。めっちゃいいなあって。

紙谷　川口さんは、３カ月目ぐらいから、よく本を読んで調べ物をしていました。横で見ていて、もっと教えを知ろうという意欲があるんだなあ、って同じ部屋でずっと一緒に過ごしてて感じました。

川口　いえいえ。紙谷さんはもともと天理教を知らないのに、いつも一生懸命ですごいと思ってました。入って最初の頃、「ひのきしんに行きましょう」って誘われて、一緒に回廊拭きをしたり、神苑の草引きとか掃き掃除をしたんですけど、僕なんか、境内掛に「ひのきしんをさせてください」なんて言いに行ったこともないし、それを一緒に行って、何でも貪欲に学んでいるのを見ると「すごいなあ」と感心していました。

狗巻　紙谷さんは奥さんにお道の言葉を言われたときに、素直に受け取っていて、すごいなあと思ってました。おてふりも３人の中で真っ先に覚えて、何でも一生懸命している姿がすごくて、「紙谷さんが頑張ってるから、私も頑張ろう」って思えました。

――今後はどう進まれますか？

紙谷　会社を辞めて再スタートの前に修養科に来て、天理教のことを学ぶことができたので、教えを知るのと知らずに次に進むのは大きく違うと思います。本当に転機だったと感じています。

これからは、修養科の経験を還元していかないといけないなと思っています。今までは生活のため、自分が豊かになるために仕事をしてきました。人生の半分まで来て、他人や社会に対してなるべく直接的な部分で役に立つとか、奉仕で還元して、それが自分の喜びや楽しみになるような仕事に就きたいと思っています。

あと、修養科主任・永尾先生の講話で、「教会と繋がりなさい」「親に顔を見せにいくことが大事」というお話があって、教会との繋がりをしっかりと持っていたい。

それと、自分が天理教の修養科に行ったことを、恥ずかしがらないで人に伝えていくこと。自分自身がもっともっと天理教を好きになって、自分の中で広げていくこと。自分自身がもっと教えに興味を持たないと、人には伝わらないと思うんです。そうすれば、自発的にもっと動けると思うので、もっともっと好きになろうと思っています。そういうための時間づくりも大切だと思っています。

修養科第962期生の３名。仲良くたすけあいながら３カ月をおぢばで過ごした。

川口　修養科は、勉強して学ぶ以外のところでも、安心できて楽しいところでした。

教会に住み込んだり、青年勤めをしている方もすごいと思うんですけど、普通に仕事をして、その中で天理教を信仰していくのも大事だと思うので、僕は仕事をしながら、天理教の人らしい生き方を模索したいと思います。

修養科でおさづけの理を拝戴しましたが、まだまだようぼくとして発展途上で、心も治まっていません。これから一般の生活に戻りますけど、天理教の人として少しでも周囲の人を何かしらの形でたすけていけるような人になりたいな、と思っています。

狗巻　この３カ月で、私は本当に心の向きが変わりました。これからは、何でも喜んで、楽しく陽気ぐらしができるように、身体を健康に使わせてもらっていることに感謝しながら、日々を過ごしていきたいと思います。

修養科に来て、たくさんの人に支えていただいて、そのたびに人の優しさと温かさを感じました。自分もその優しさを誰かにかけられるようにしたいと思います。

また今までたくさんの方に、数えきれないぐらいおさづけを取り次いでもらいました。今度は私が、人のたすけを願える人になって、たくさんの方におさづけを取り次がせてもらおうと思います。

――ありがとうございました。

（聞き手　編集部）

喜びの奉告祭

神殿落成奉告祭並びに創立90周年記念祭

本氣分教会

10月31日、本氣分教会（西本興正会長・大阪府茨木市）は、大教会長夫妻をお迎えして、神殿落成奉告祭並びに創立90周年記念祭を執り行った。随行は、山本義範役員。

本氣分教会は、神殿が年限と共に傷みが激しくなっていたが、平成30年に発生した大阪北部地震により大きく損壊。役員や信者と談じ合いを重ねた上、教会創立90周年の旬に神殿建築の運びとなった。普請には多くの教友がひのきしんに集まり、神殿が完成した。奉告祭前日には、真新しい神殿で鎮座祭を執り行った。

奉告祭当日、午後1時30分、西本会長が祭文奏上。続いて大教会長が挨拶。建物に例えてそれぞれの役割などについて話を進め、「陽気ぐらしの手本となる教会を目指して、会長を芯に、教会に繋がる方々がそれぞれの徳分や持ち場立場を生かして、理想の姿に近付いていただきたい」と願われた。

陽気におつとめを勤めた後、西本会長が「先人方は紆余曲折のある中で、苦労に苦労を重ねて歩まれた。私もしっかりと後に続かせていただきたい」と挨拶し、参拝者には弁当と記念品が渡された。

参拝者は、39名であった。

創立120周年記念祭

島原分教会

10月16日、島原分教会（岩切正教会長・長崎県南島原市）は、大教会長夫妻をお迎えして、秋季大祭に併せ創立120周年記念祭を執り行った。随行は、湯川正圀役員、瀧本眞二郎役員。

午前10時30分、大教会長の親神様・教祖・祖霊様礼拝によって開式。岩切会長の祭文奏上の後、大教会長が挨拶。「こうした節目の旬には、設立当初の初代や先人の信仰を尋ねて、その精神を学ばせていただくことが大切」とした上で、岩切カ子初代会長の入信と熱烈な布教の様子を引いて、「世界たすけの志」「大きな心で道を通ること」「夢や明確な目標を持つこと」の大切さを説かれた。

陽気に勇んだおつとめに続いて岩切会長が挨拶。「生涯を、可能な限りおたすけ人としてつとめる決意を新たにした次第です。お言葉を肝に銘じて、島原分教会役員・教会長・ようぼく・信者一丸となって御用に勇ませていただきます」と決意を述べた。

その後、参拝者にはお弁当と記念品が配られ、一同感激のうちに帰路についた。参拝者は、110名であった。

こかん様に続く会

婦人会女子青年

10月10日、婦人会女子青年（井筒さちえ委員長）は、親里で「こかん様に続く会」を開催、11名が参加した。

初めに井筒年子・婦人会芦津支部長よりお話。神殿で参拝した後、詰所で毛布搬入のひのきしんを行った。昼食後は、「こかん様」と「大和神社のふし」についての勉強会をした上で、実際に大和神社を見学。詰所に戻ってからは、大教会秋季大祭でのコーヒー、レモネードサービスのポスターを作成した。

参加者からは、「短い時間だったが、久しぶりに直接顔を合わせてお話ができて嬉しかった」「毎日の生活でも、教祖を感じられるような素直な心で通らせていただきたい」などの感想が聞かれた。

参加者全員でポスター作り

双名島女子青年が徒歩団参で芦津大教会に参拝

10月17日、双名島大教会の女子青年とサポートスタッフの青年会員ら22名が、十三峠越え徒歩団参に向かう途中、芦津大教会に参拝に訪れた。

双名島大教会は今年創立110周年を迎え、「過去に感謝　現在に喜び　未来に夢・希望」を活動方針としている。

団参に同行された双名島大教会長・中腰治夫先生は、「現在は、親々の通った道を知らない若者も多い。こうした機会に親を訪ねる機会を持とうと、元の上級教会である池田大教会、芦津大教会に参拝させていただいた。団参の前日には、芦津の初代様の話や双名島初代の入信の話などを伝え、若い人に『過去に感謝』の大切さをわかってもらえれば」と経緯を語られた。

大教会在住者と共に記念撮影

行事中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、左記の行事が中止となりました。

〔本　部〕

お節会　1月5日～7日

登　用

【役員】

瀧本　庄司

【婦人】

岩切　孝子

【准婦人】

花岡由紀子

立教184年10月23日

教務部報

教会長資格検定合格

小野田駿平（順　世）
段野　渉（大　清）

立教184年10月17日教会長資格検定講習会第115回を修了し、翌18日検定合格されました。

教人登録

小野田駿平（順　世）
瀧本はるえ（兵庫眞洲）

立教184年10月1日

修養科第962期修了

狗巻　佳歩（畦　川）
川口　晃徹（芦　南）
紙谷　理史（甲　邊）

立教184年10月27日

三日講習会Ⅲ修了

井内　豊明（徳　修）
杉下　雅代（北　地）
佐藤　俊晴（鎮　名）

立教184年10月17日

おさづけの理拝戴《9月》

濵本　元徳（島原港）

初席《9月》

〈2名〉毛見
〈1名〉島長・浪華浦

〈順序運びより　4名〉

《お知らせ》

立教185年

元旦祭

大教会　午前1時
ご本部　午前5時

月例統計（自令和3年1月1日～至令和3年9月30日）

名称（）内教会数 ＼ 項目	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	11	4	2	
靱（13）				
東津（23）	4	2	2	2
吉野川（29）	1	2		
島原（16）	3	6		
日方（15）	4	5		
稗島（7）	2	2	2	1
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）				
門司（6）				1
當別（6）				1
大島（26）	4	7	6	
沖縄（3）				
尼崎（2）		2		
四ツ山（5）			1	1
大冠（2）				1
島下（1）				
天保山（3）	1			
青木（1）				
芦浪（1）		1		
甲邊（1）	1	1		
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	3	1		
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）	1			
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）		2		
神滝本（1）				
芦明徳（1）		1		
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	35	36	13	7